

---

# 白銀月夜の狼

露草緋織

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白銀月夜の狼

### 【Nコード】

N8224Y

### 【作者名】

露草緋織

### 【あらすじ】

ある雪の降り積もる朝、伯爵子息カーティスはなくしものを探しに森へ出かけた。

その森で彼は小さな少女を見つけた。

華奢な身体を覆う艶やかな長い銀の髪。濃蒼色の瞳。

その少女はフェリシアと名乗った。

フェリシアは何故か人間嫌いで、カーティスのことも誰も信用しない。

気遣って温かい言葉を掛けても、冷たくあしらうばかり。

そして、彼女は寒い場所を極端に好む。

暖かい屋敷に招き入れようとすれば、眼を怒らせ激しく拒否するのだ。「私は厳寒のあの森でないと生きられないのだ」と。

白く冷たい風が辺りの木々を撫でる。

葉も無い枝は、サワサワと哀しく軽い音を立てて静まる。

気温は下がっているというよりも、ない。水などの液体も存在しない。何故なら瞬時に凍ってしまうから。

生物が全くいないようなこの真つ白な冬の森。

真冬。闇夜。満月。雪。      この条件が揃ったときのみ、「それ」は姿を現す。

白銀の体毛で覆われ、睫毛も白銀。

色が薄く、いかにも儚いといった感じで煙のように消えてしまいそう。

しかし濃蒼色の瞳が爛々と輝き、儚いという印象を打ち消す。その瞳は、まるで。

狼。

そこには二匹の狼が静かにこちらを見つめていた。

\*\*\*

「何故だ……。何故死なねばならぬ。あのような下等な生物の為に」  
「下等は貴様だ。我が掟を破るなどと愚劣な行為を」

この場は冷たい。寒い。

緋色の髪。燃え盛る炎の如きその髪色は、我が種族にとっては不愉快極まりない。いつだ、いつになれば……。

「お前は大罪を犯した。二度とここに現れるでないぞ」

それは、我が同胞を護るために犯した罪だとしても。生きるために殺したのだとしても。

掟を壊さぬために作られた掟は、あまりに残酷だ。

銀よ。かつて我を創っていた銀よ。  
もう一度我を受け入れてくれたまえ。そして。

「あの森に。あいつの元へ……。逢いたいのだ……」



「あーあ、何でこんなことに……」

コートに首巻に手袋に、と体中を防寒具で包み込んだ少年は小さく息をついた。

青い瞳に金髪が眩しく光るこの少年の名は、カーティス・エアルドレッド。エアルドレッド伯爵家の三男坊である。

歳は十三。何となく大人に近づいてはいるが、その顔にはまだ子供特有のあどけなさがしつかり残っている。良く言えば「可愛らしい」、悪く言えば「童顔」だ。

何故彼がこんな時間にこんな所をうろついているのかというと、「そもそもティファニーとカイルが悪いんじゃないか。僕は何もしてないし。ティファニーのただの自業自得なのに……」

昨夜はカーティスの姉・ジュリアナの十六回目の誕生日だった。

普段から美しい姉だ。誕生日ということで侍女が気合を入れて召かしこんだジュリアナはいつもより増して美しかった。カーティスは昨夜のジュリアナへは「美しい」「綺麗」しか口から出なかった。他にこの姉を飾りたてる形容詞を思いつかなかったのである。

でも……。

でも、姉さまはお化粧なんかしなくても、とっても綺麗だよ。

素直に述べるとジュリアナは、ニコツと白い歯を覗かせながら、「ありがとう。今日一番嬉しい賛辞をもらったわ。大好きよ、カーティス」と白く華奢な腕でたった一人の弟を抱きしめた。

その美しさと同等に、ジュリアナは心も美しかった。困っている人を放っておけない性格なのだ。病気で道端で転がっている貧しい

乞食の少年を屋敷まで運び入れ、看病したこともある。

そんなジュリアナ嬢を祝おう、とエアルドレッド家に招かれた貴族が沢山屋敷に足を運んだ。勿論、親戚のベックフォード子爵家もティファニー・ベックフォード。

茶髪の巻き毛が可愛らしいティファニーは6つ年下の7歳。カーティスとは従兄妹になる。カーティスの母とティファニーの父が姉弟なのだ。即ち、ベックフォード家はカーティスの母の実家だ。

ティファニーは、ジュリアナに「ジュリアナ、お誕生日おめでとう」と抱擁を交わした。その後ウロウロしていたのだが、食事の準備をしていた侍女にぶつかり、その弾みで侍女は持っていた食事を食器ごと床に落としてしまった。それを見ていたジュリアナは、「用意が出来たら呼んでもらうから、カーティスの部屋で遊んでいなさいね」と柔らかく微笑んで「あとは頼んだわよ」とカーティスの耳に囁いた。

ティファニーに部屋で一緒に遊ぼう、と告げるとティファニーはタタタツと走り出した。ティファニーはよくこの屋敷に遊びに来ているので、何処にどんな部屋があるのかよく知っている。階段を目散に駆け上がると、まだ登っている途中のカーティスを急かした。「はやくはやく！ はやくしないと部屋を荒らしちゃうわよ」「無駄だよ。闖入者が勝手に入らないように鍵をしてあるから。そして鍵は僕が持つてる」

巻き髪少女は、カーティスの答えにぶくつと小さな頬を膨らませる。

ようやく部屋の扉の前に辿り着いたカーティスは、ポケットから黄金に輝く鍵を取り出した。鍵穴に差し込み回すと、ガチャ、と錠が外れて扉が開く。

カーティスの部屋に入ると、あの動作の何が不思議なのか、ティファニーは小首を傾げた。

「ねえ、何で鍵なんかしてるの？ カーティスを狙う悪者でもいる



の？」

「どうやら動作が不思議だったのではなく、何故鍵をしているのが気になったらしい。」

カーティスは小さな巻き髪少女の質問に答えてやる。

「僕はこう見えても伯爵子息。現在のところ、爵位継承権第3位だよ？ 暗殺者がいたとしてもおかしくない」

まあ、どうせ僕に継承権なんかまわってこないだろうけどね。だって予備の予備だから。

「あんさつしや？ それなあに？」

やっぱり小さな巻き髪少女。頭の中も小さいらしい。カーティスの言葉は恐らく半分も理解できていない。

「物陰からそおうつと覗いて、隙についてこうグサツ、とやる奴らのことさ」

カーティスは自分の胸を突き刺す真似をした。ティファニーは怖がるだろうと思ったが、この幸せ少女に『恐れる』という感情は多分ない。ぴよんぴよん飛び跳ねて楽しそうに笑った。跳ねるたびに、ドレスの裾がヒラッヒラッと舞う。

「こら、貴族の息女たるもの、はしたない行動をしちゃいけないよ。ブライスさんにも怒られたんだろ？」

ブライスさん、というのはティファニーの女性教育係（家庭教師）だ。目まぐるしく動くティファニーを見つけては諫める。このお転婆少女を育てるのだから、きつと骨は折れまくるんだろうなあ。

ブライスの名前が出ると、いつも途端に大人しくなるティファニーだが今日は違った。

「はしたなくなんかないもん！ この前ジュリアナだってティファニーとおんなじようなことしてたもの！」

「姉さまがティファニーみたいなことするわけが……」

ハッとして口を噤む。思い当たることがあったのだ。

ジュリアナはもう17。もうそろそろ社交界デビューをしてもおかしくない。社交界デビューをして婚約者を見つけるのだ。

そのためにはダンスを踊れなければならない。これは嗜みなんだとジュリアナが言っていた。

恐らくティファニーはジュリアナがダンスの練習をしていたのを見ていたのだろう。しかし、ジュリアナの（きつと）素晴らしいダンスと、巻き髪少女が飛び跳ねたのが『おんなじ』なわけがない。そこは訂正する。

「違うよ、ティファニー。姉さまのとは違うんだから、人前で飛び跳ねちゃだめだよ。ブライスさんが首根っこを？まえて怒るよ、きつと。いや絶対」

と今回は効果があったようだ。ティファニーは興奮のため真っ赤になっていた顔がスツと鎮静した。そしてそのまま喋らなくなった。そのまんますぎるな、と苦笑。カーティスは優しく巻き髪頭を撫でてやった。

「ごめんごめん。ほらこれで機嫌なおしてよ。ティファニーには明るい笑顔が似合うよ」

カーティスはそう言って立ち上がり、ある物を手に取って戻ってきた。

それは、

「うわあ、すごい！鳥なんて初めて見た！」

ティファニーは声を荒げて、くるん、とした目を輝かせた。

カーティスが持ってきたのは鳥籠だった。中には水色や青などの色鮮やかな鳥。カーティスが12歳の誕生日のとき、ジュリアナからもらったのだ。

「可愛いだろ。名前はカイルっていうんだ」

「へーえ。カイルっていうんだ。かーわぁいい！」

語尾をやけに伸ばして、ティファニーはニコニコ顔だ。そりゃそうだ、鳥なんて滅多に見ないもんな。最近はとっても寒いし。そうでなくても僕たち貴族はほとんど屋敷から出ないし。

「あれ？どうしたのかな、カイル？」

何かしたのかティファニー？ とカーティスは一緒に鳥籠を覗き込む。

カイルの粒のような黒い瞳は、ティファニーの胸辺りを見つめて微動だにしない。

「ああ、ティファニーのこのブローチが気になるんだよ。鳥は光るものが好きらしいし」

「へえ、そうなの。ねえ、カイルを籠から出していい？」

ティファニーがあまりにも笑顔を輝かせて言うものだから、カーティスは許可した。

「いいよ。カイルは賢いから合図すればすぐ籠に戻るよ。例えば外にいてもね」

と言うと、ティファニーはカイルを鳥籠から出した。そして胸元のブローチを外してカイルの足元に置く。

カイルがブローチを興味津々で覗き込んでいる間に、ティファニーは窓際に駆け寄ると窓を開けた。瞬間（当たり前だが）冷たい風が部屋に吹き込んできた。

「ちよっ……。やめてよティファニー。寒いじゃないか」

「少しだけ少しだけ。ほうらカイル、外に出てごらん」

カイルは飛び立った。

ティファニーのブローチを嘴に携えて。

「ああ

っ！！」

ティファニーの絶叫が屋敷中に響き渡った。カーティスはティファニーの口を塞ぐことしか出来なかった。

こうして冒頭に戻る。

あのあとすぐカーティスは口笛を吹いてカイルを部屋に戻らせた。

戻ってきたカイルの嘴には何もなかった。きつと重みに耐えきれずどこか（恐らく森。カイルは外に出せば絶対森に行く）に放置してきたのだろう。

ティファニーは泣きばなっしで、カーティスが慰めたが落ち着く気配がなかった。ブライスを呼ぼうとしたが憚られた。あのブローチはティファニーの祖母の遺品なのだから。

ジュリアナの誕生祝いには何とか涙は引っ込んだが、目は真っ赤に充血したままだった。食事をそこで席を立ち、ティファニーはブライスに連れられ客室に籠ってしまった。

「ああもう、何処だよ。あんな小さいブローチなんか見つかるわけない……」

屋敷を出てからもうそろそろ小一時間になるだろう。手は悴んで、身体には血が巡っていない気がする。

もう諦めて帰ろうとした時に、小さな、しかしよく響く鈴の鳴るような声がカーティスを引き留めた。

「探し物はこれか……？ 朝早くからご苦労なことだな……」

雪と同じ白銀の髪が見えた。

枯れ果てた木々。辺りを白に染め変える雪。

この余りにも寒々しい森の中に、その少女はいた。

顔は人形の如く端整。筋が通っている高い鼻。小さな薄い唇。まさに十全十美という言葉が相応しい。肌は色が無いのかと疑うほど白い。少女が身に着けているのはあまりにも簡素な衣服だ。真っ白なワンピースのようなもので、膝丈ほどしかなく細い腕や脚が晒されている。

髪は真っ直ぐで長く、小柄な少女を覆い隠すほどだ。

すべてが『白銀』で統一されている身体に、唯一の『色』がある。瞳だ。濃蒼色で、獲物を捜しているかの如く爛々と危険な輝きを放っている。右眼がやけに。それはまるで、肉食獣。

普通の生物なら一瞬で凍えてしまいそうなこの雪。しかし少女は無表情で雪の上に座り込んでいる。

少女は、鈴が鳴るような涼やかな声で、

「探し物はこれか……？ 朝早くからご苦労なことだな……」

今にも折れてしまいそうな華奢な腕。指に何か光るような物を持つて掲げていた。恐らくティファニーのブローチだろう。

カーティスは暫らく言葉を失っていたが、ようやく声を喉から絞り出した。

「……ああ、そう、それだよ。無くして困ってたんだ。ありがとう、助かったよ……」

カーティスは、少女の方へ震えながら手を伸ばした。震えている

のは寒さからか、驚きからかは彼には分からなかった。

カーティスと少女の指先が触れる。カーティスはぎょつとして眼を睜った。

手袋ごしだが、あまりにも冷たいのだ。雪と同等かそれ未満の冷たさ。氷でも触っているかのようだ。

何だこの子は。人間なのか？

カーティスにブローチを手渡すと、少女はもう用は終わったと言わんばかりに踵を返した。更にカーティスはその姿を見て驚いた。靴を穿いていなかった。裸足だったのだ。直で雪を踏みしめて大丈夫なのかと思ったが、赤くなっているわけでもなく、手足の色と変わらない。

彼はとっさに、背を向けた少女に声を掛けた。

「ね、ねえ！ ブローチを拾ってくれたお礼がしたいんだけど！ 時間、あるかな？」

少女はぴたりと足を止めた。

そして、ゆっくり、実にゆっくり首をこちらに向けた。

「……礼、時間。……構わぬ」

と、単語だけを発した。

その声の裏側に何やらありそうで、カーティスは身震いしたが少女の手を握った。

やはり冷たく、放しそうになったが何とか持ちこたえた。彼はこの少女が孤児で森に放置されたのだと思い、少女が了承すればエアルドレッドの屋敷に置くつもりだった。

手を繋いで歩いていたが、少女は何も喋らない。先程、少女の衣服が余りにも寒すぎると思ったので、首に巻いていたマフラーを差し出そうとした。しかし少女に「要らぬ」と一蹴された。それきりお互い一言も発しない。時間が立つのと比例して、どんどん沈黙が

重くなってきたのでカーティスは思い切って少女に尋ねた。

「ねえ君。……名前は？」

やや沈黙が流れる。

やがて少女は、完璧に整った顔の一部分の唇を動かした。

「……フェリシア、だ」

\*\*\*

3分ほど歩くと、待たせていた馬車が見えてきた。

馬も流石に寒いのか微妙に身体を震わせている。御者もブルブルと震えながら外套をかき寄せている。

カーティスは長い時間待たせていたことを非常に申し訳なく思い、小走りになって馬車に近づいた。

「遅くなってごめんなさい、グレアム！」

大声で御者のグレアムに謝罪する。するとグレアムは顔にパツと赤みを散らせて微笑んだ。

「おお！ カーティスぼっちゃま！ なかなか戻られないので遭難でもなされたのかと……。もしそうなれば私は腹を切らねばならぬと……。ああ、ご無事で何よりでございます！」

大袈裟だな。グレアムは感涙に咽んでいる。カーティスはポケットからハンカチを取り出すと、グレアムに手渡した。

「ありがとうございます、後で洗って必ずお返しいたします」

「いいよ、ハンカチならいつでも用意してもらえるし。ねえ、お願いがあるんだけど、いいかな？」

「はい、何なりと」

グレアムは目元を拭き終わると、ハンカチを丁寧に畳んだ。その間にカーティスは自分の後ろに隠れていた、少女フェリシアを前に連れ出した。フェリシアを目線を上にあげるように促す。

「おや、この子は一体……？ それにしてもそのような粗末な衣服とは。乞食ですか」

グレアムもカーティスと同じことを考えたようだ。しかしその明け透けな言い方がフェリシアを傷つけないかと、カーティスは内心ヒヤヒヤしながら返事をした。

「いや、よくは分からないんだけど……。さつき森で出会ったんだよ。この子も屋敷に連れて帰ってもいいかな」

「はあ……、それは私の権限ではありませんので何ともしよう。旦那さまに伺うしか……」

言われてみれば確かにそうだ。父上のお考えを拝聴するか。

カーティスはフェリシアを押し上げて先に馬車に乗らせる。自分も乗った後、扉を閉めた。

「あ、そうだグレアム。このままエアルドレッドの屋敷に帰らずに、ベックフォードの屋敷に寄ってくれる？ テイファニーに渡すものがあるんだ」

すぐさま「承知しましたあ！」と上げ調子な了解の声が聞こえた。きつと鞭を振り下ろす直前だったのだろう。

パシィツ、と馬を叩く音が辺りに響く。それを合図に馬車が走り出す。

ふとカーティスは隣りの少女の横顔を伺う。すると彼女は美しい顔を、苦虫を噛み潰したかの如く酷く歪ませていた。

\*\*\*



ベックフォード家の呼び鈴を鳴らすと、少し時間がかかったが執事が応答した。

ブローチをティファニーに渡してくれるように、と言付けてカーティスは巻き髪少女の屋敷を後にした。

再び馬車に乗り込むとグレアムが「今日はやけに寒いですな」と声を掛けた。

確かに。カーティスも、この馬車の中に居るよりも外に出ていた方が、まだマシだったような気がしていた。

フェリシアが乗っているからだろうか。

初対面のときから感じていること。それは、この銀髪少女が「冷氣」という見えないオーラを纏っているようだ、ということ。まじまじと彼女を見つめてみると、フェリシアは不機嫌になったらしいふん、と鼻をならせてそっぽを向いてしまった。

カーティスはフェリシアに嫌われてしまったのかと、若干気を落としながら黙って馬の蹄の音に耳を傾けた。

「着いたよ、フェリシア。ここが僕の家さ。降りようか」

立派な大邸宅の前に馬車が止まる。カーティスを出迎えようと、数人の侍女が門先で待っていた。カーティスは先に降りると、フェリシアに手を貸そうとした。しかし彼女が裸足だったということに気づき、傍に控えていた侍女に貴婦人用の靴を持ってくるように指示した。

数分後、侍女が淡い桃色のセミ・パンプを抱えて戻ってきた。

「フェリシア。裸足のままじゃ寒いし、怪我するから靴を履いて。1人で出来るかい？」

貧乏孤児なら、ヒールがある靴など履いたことがないだろうと氣遣う。と、フェリシアはまたもや、ふんと鼻を鳴らして眉間に皺を寄せた。

氣遣われたのが気に障ったのか、とカーティスはこの少女をどう

扱えばいいのか分からなくなった。

「……………ぬ」

「え？」

「私は靴など履かぬ。人間が作ったという物なら尚更な」

「そんなこと……。君も人間なんだろう？」

人間なんだろう？

途端フェリシアは、くつつきそうなほど眉根をぎゅっと寄せた。眼も鋭くなり、厳しい陰のある表情になった。

「……やはり礼や詫びなどろくでもないな。人間など信用ならぬ」  
馬車の上から冷たい視線で冷たい声を投げる。

フェリシアが口を開いたとき、カーティスは吃驚した。

歯が尖っている　　牙が見えたような気がしたのだ。

いやいや。流石に違うよな。瞳も体温も言動もおおよそ人間らしくないが、姿は人間そのもの。しかも怪物や妖怪などいるはずがない。カーティスは架空の生物は信じない性質たちなのだ。

気を取り直してもう一度、フェリシアに話しかける。

「そんなこと言わないで。外は寒かっただろう？　屋敷の中なら暖かいから」

すると彼女は、怒ったような哀しくて泣き出しそうな　　。何ともいえない表情をした。

「　　私はあの森を離れられない。私は厳寒の地でないと生きられないのだ」

フェリシアは目の前にある靴を無視して、馬車を飛び降りようとした。

しかし辺りがよく見えなかったのか、馬車の扉部分にぶつかって悲鳴を上げた。余りに痛かったのか、その場に蹲ってしまう。カーティスは慌てて彼女の顔を覗き込んだ。

「ちよっ、大丈夫！？　どこ打ったの！？」

真っ白い顔の額部分が、すこし赤くなっていた。カーティスがフェリシアの額部分に手を当てようとすると、彼女は細い腕で振り払った。

そして呆気にとられているカーティスをはじめ、周りの侍女たちを尻目に自力で立ち上がる。今度こそ馬車から飛び降りると、侍女たちの静止も聞かずに走り出した。華奢な脚だが、恐ろしく速い。あつという間に視界から消えた。あの方向だと、今来た道だからあの極寒の森だろう。

「何なんだ……。フェリシア、君は一体……？」

カーティスはフェリシアが走り去った方向を凝視しながらつぶやく。

刹那、ゴオオツと強い吹雪が辺りを飲み込んだ。侍女たちが、キヤアツと甲高い悲鳴を上げる。

フェリシアの白銀の髪と同じ色の雪が、更に寒々しい冬へと誘う。「さあ、カーティスさま。お部屋に入りましょう。遅くなりましたが朝食もご用意してございます」

侍女の一人が雪から眼を守るために、眼を窄めながらカーティスの背中を押した。

カーティスは促されるまま、暖かい屋敷へと戻ったのだった。

木々が今日はやけにざわつくな。

ああ、そうか。今日は何故か吹雪が強いのだ。

濃蒼色の瞳の少女      フェリシアは生まれ育った森に戻ってきた。長い白銀のさらさらと風に靡かせながら。

いつものように雪の上に座り込もうとする。すると急に左眼に激痛が走った。

左眼を押さえて蹲る。心臓がドクンドクン、と強く激しく脈を打っているのが分かる。

しばらく激痛に耐えていると、少しずつ痛みが緩和されてきた。フェリシアは立ち上がり、傍の木に凭れかかった。

その衝撃で、枝に引っかかっていた雪たちが髪の上に舞い落ちてきた。

フェリシアは冷たさというものには強く対して気にはならないが、そつと頭の上のものを払いのけた。

「あいつ」がいなくなったのも、こんな風に白銀が美しく映えている日のことだったな。

「はやく姿を、無事な姿を……」。私はお前に逢うまで死なぬ。死ぬことはできぬ。何故なら『白銀<sup>誇り</sup>』を失ってまで、私を護ってくれたのだから……」

白銀の髪の少女は、今なお雪を生み出している空を仰ぐ。弱々しく手を伸ばしたが虚空を搔くばかり。

フェリシアの「右頬」には、透明な涙が伝っていた。

神よ。我らを創りし神よ。どうか、もう一度あいつに。あの荘厳な姿に。

「もどらせてくれ……」

\*\*\*

カーティスはその日も、勉学に励んでいた。

政治に経済、物理に科学に数学に至るまでありとあらゆる分野の知識を頭に柔軟に叩き込む。

カーティスには既に2人の兄がいる。しかもどちらも屈強な父に似て頑丈な体躯をしている。長男か、長男が不幸なことになれば次男か。どちらにせよ、カーティスが跡継ぎという可能性は低い。

次兄は、長兄がエアルドレッド伯爵となった暁には、国王陛下直属の軍隊に入隊するつもりらしい。貴族の子弟は、よっぽど無能ではない限り、尉官や佐官以上の上級将校の地位が約束されている。

要するに軍か学か、どちらかで身を立てていくのだ。

そして三男であるカーティスは後者を選ぶつもりでいる。兄たちのように力がないことはもう十分分かりきっているし、何より軍人というものが苦手なのだ。

兵器を使いこなせる自信も、傷つき流す血を無心で眺めていられる自信もない。誰かの命を奪うということはどうしてもやりたくない。そして「祖国のためだ、国王のためだ」という覚悟も恐らく出ない。陛下の御尊顔は肖像程度で、直に拝見したこともないのに、尊い命など捧げられるものか。口に出せば貴族社会から煙たがられてしまうだろう。だから漏らしはしないが、軍人、軍役などはごめ

んだ。

次兄は過去の軍書を読んで、心が勇み震えたという。だがそれは実戦に出ていないからだ、とカーティスは思っている。大きな砲弾や破裂音が飛び交い、冷静にいられる人間がいるものか。「勇み震える」は「恐れ慄く」に変化していくに違いない。

「戦争や恨みごとがない世界に変えられる人になりたい」それがカーティス心からの願いで、夢だ。だから色々な方向から物事を捉えることを可能にするために、膨大な知識を身に付けているのだ。貴族だからって優遇されたくない、実力で未来を切り拓きたい。

「戦争のない世界」……綺麗ごとなのも分かっている。この世には何万という膨大な数の人々がいる。その何万が1つの考えにまとまるなどあり得ない。違う思いや意見を持っていて当然だが、それが争いになり、国単位の戦争に発展していくのを食い止めることが出来たら……。命を捨てて国を護るより、話し合いや外交で国を護るほうが何倍も格好いいに決まってる。カーティスはそう確信していた。

外国の読解不能の書物は、それぞれの教科の教師に訳してもらう。それは教師もカーティスも難儀したが、得られるものは少なくない。

今日の分の勉強が済むと、もう日が落ちようとしていた。ぶつ通しで4時間弱机に向かっていたということになる。毎日フラフラになるが、確かな手応えは日々感じている。

頭が疲れて痛くなってきたので、カーティスは自室の寝台に倒れこんだ。夕日が放つ淡い橙が優しく癒してくれる。

少し睡眠を取ろう、とウトウトしている状態のとき、扉を叩く音が聞こえた。

はい、と返事をして寝台から起き上がると、遠慮がちに扉が開いた。

「ジュリアナよ。……お時間はあるかしら？」

金色の髪を見事に結い上げたジュリアナだった。

「ごめんなさい。お疲れのところを邪魔してしまつて」

カーティスの自室に入り、扉をまた遠慮がちに静かに閉めた。

この姉は、たとえ相手が弟であっても丁寧な態度と言葉づかいをする。もともと斟酌をする人物ではあるのだが。

「いいえ、邪魔ではありませんよ。それより姉さま、どうなされたんですか？」

しつこいようだが、確かジュリアナも今ダンスのレッスンに忙殺されているはずだ。そのジュリアナがわざわざ弟の自室を訪れるなど、何かあつたのか。

「ええ……。もしかしたら私の勘違いかもしれないのだけど。……最近貴方に元気がないように見えて。それで、心配になつたの」

ジュリアナは長い睫毛で目を伏せながら、手近にあった椅子に腰かけた。カーティスも向かい合わせになる体で椅子に座る。

「私の見間違いだったらごめんなさい。でも普段元気なカーティスが、つらそうなのは、私もつらくて。もし、話せることなのだったら、私に話してほしいなつて」

ジュリアナはよくこの弟・カーティスのことを見ているようだ。自分でも出していないと思つていた細やかな感情の変化を感じ取れるとは。

「元気がない」思い当たるのは……。

人間離れた少女・フェリシアのことだ。

カーティスはあるとき　森で、フェリシアの手をとつたとき

フェリシアから受け入れられたと思つていた。それが2回も鼻であしらわれ、拳句の果て「信用ならぬ」と言つて走り去つてしまわれては、傷つく。誰であつても。……と思つ。

しかしそれを他人に言うのは憚られた。何故か、とは言い表しにくいが、とにかく誰にも彼女の存在を広めたくなかつた。

カーティスは出来るだけ明るい表情になるように努めて答えた。  
「大丈夫です。僕には何の心配も悩みもありませんよ。ただ強いて挙げるなら、『童顔』からおさらばしたいものですね」

『童顔』。これはカーティスのコンプレックスのひとつだ。

ジュリアナは、ぷつと吹き出すと手で口元を押さえた。それらの動作でさえ、優雅で気品が漂う。

「そう。なら良かった。だーいじょうぶ。童顔なら時間が立てば何とかなるわよ。父さまも母さまもお綺麗な方でいらっしやるしね」  
ジュリアナは最後に弟を抱きしめる。抱きしめる腕はカーティスと変わらないか、カーティスより細い。カーティスも姉の背中に腕を回した。姉の滑らかな金髪が顔にかかって少々むず痒かった。

\*\*\*

そのころフェリシアはまた、左眼の眼痛に苦しめられていた。最近どうも激痛の頻度が増え、間隔も短くなってきた。

しかし薬はない。だから黙って耐えているしかない。

痛みの最中には、脳裏に何かが浮かび上がってくる。何かの、断片のような。

ほどなくして痛みが落ち着いてくると、フェリシアは目をそっと閉じた。途端世界は真っ暗な何も無い世界へと切り替わる。

いつまで、私は。

「孤独でいればよいのだ……。これも掟を破った罰なのか……？」

目を開ける。見ると、一度止んでいた雪が、再び降り出した。フェリシアにとって雪ほど心地よいものはない。

木々に凭れると、雪がフェリシアの全身にかかり、やがて自然と



敷布のようになる。

そういえば、あの数日前に出会った少年。変におせっかいなヤツだったな。……私とは違う、きつと常に誰かに囲まれて過ごしているのだろう。私のことなど、とうに忘れて。

自分から蹴ったくせに、何だか寂しくなってきた。フェリシアはぶんぶん頭を振る。乗っていた雪はハラハラと舞い落ちて、地面の雪と同化して分からなくなる。

陽と月が交代した。これからは漆黒の闇が広がっていく。

フェリシアは激痛に襲われた疲れのせいか、痛みから解放された安堵のせいか、目を閉じるとすぐに意識を手放した。

そもそも私は今までずっとひとりぼっちだったではないか。その私が『寂しい』という感情を持つわけがないのだ。……。

『　　生きる。生き続けるのだ。我の分身よ。誇りを失わなければ、いずれきつと……』

嗚呼、そんな日は、果たして訪れるのだろうか

……？

雲の切れ端まで隅々みえる。草木がかすかに揺れる程度に風が吹く。鳥たちが木や空で大合唱。

そして、最近灰色一色だった空に、色鮮やかな青が戻った。そう、今日はこの寒い地方じゃ滅多にない、晴天の日だ。

雲や霧に邪魔されず、本領発揮の太陽から光が溢れ漏れだしている。それは、カーテンを切り裂く勢いで、窓から差し込む。

本来なら踊り子ならば、舞の一つや二つ舞うところなのだ。が。……カーティスはそれのおかげで目が覚めた。

カーティスの場合、一度目が覚めるとスイッチが入ってしまうのか、二度寝は出来ない。侍女や教師は褒め称えてくれるが、ティファニー曰く「二度寝より心地よいものはないよ」。カーティスはしないの？ えっ、できないのぉ？ ……へー、すごいね。ねえそれって嫌味？」らしい。このティファニーの後者のひねくれ具合は、後ろにブライスが立っていたからだろう。

自分の体温ですっかり温かくなった布団を剥いで、もそもそと寝台から下りる。枕は寝るときと変わっていない。寝相は良すぎるくらいだ。……とティファニーに言ってみたら睨まれた。

ああ、今日は正直ゆっくり寝ていたかったなあ。昨日はあんなに遅かったんだから。

というのは、昨日ブローチの礼で、ティファニーが訪ねてきたからである。

「カーティスさま。先日は寒い中御手を煩わせてしまい、大変申し訳ありませんでした。……ほら、お嬢さまからもきちんとお礼と謝罪をなさい。カーティスさまにご迷惑をたあーっぷり掛けたのです

からね」

『たつぷり』をかなり強調する背景には自分の失態を巻き髪少女に理解させるためだろう。

黒縁メガネでティファニーを叱る様は、家庭教師そのものだ（実際そうである）。

ブライスはさんって……、役にハマりすぎ。

カーティスは、苦笑いで子爵令嬢ティファニーと家庭教師ブライスを眺める。

「お嬢さま。前にしっかりお立ちになって。……何をなさっておいでなのですか」

ティファニーはブライスの後ろで、何やら指をこによこによと動かしていた。ブライスの背中に垂れた黒髪を指に巻きつけているようである。呆れ顔になったブライスはティファニーの腕を、強引に引っ張ってブライスの前に立たせた。

ティファニーは顔を上げず、床を睨み付けている。

「……お嬢さま」

これで何度目なのか分かっているのか、と言わんばかりのため息で、ブライスはティファニーの肩に手を置いた。

それでもティファニーは視線を上げない。よく見れば、大理石の床に雫の粒が。

上げられなかったのだ。ティファニーの小さな身体は小刻みに震え、小さな嗚咽が漏れていた。

カーティスはそんな従兄妹を見て、腰を落とした。目線を合わせるために。

「ティファニー。もう泣かないで。……ブローチなら戻ってきたじゃないか。ね？」

優しくあやすように声を掛けてやると、ティファニーの堰は切れたようである。本格的に泣き声を上げ始めた。

カーティスは巻き髪少女の濡れた目元を拭ってやる。しかし拭いても拭いてもその目元は乾かない。

「どうしたの、何か傷ついているのかい？」

「……ウウツ、だつてえ……ヒツ、う、カーティス、怒ってたじゃない。……フツう、あの食事したときい……。すつごく、すつごく怒ってたじゃない。……ティファニー、……どうあやまっていたのか、……分かんない、の……」

食事のとき？ ああ、そうか。ティファニーは、

「勘違いしちゃったのか。違うよ、ティファニー。あのときはね、怒ってたんじゃないよ。君のブローチのことが心配だったから……」  
ティファニーのブローチをカイルが外で失くしてしまった夜の食事のとき（ジュリアナの誕生日）。ブローチはティファニーの祖母の遺品で、大変高価な物である。だが、それ以前にベックフォード家、おばあちゃん子だったティファニーの大切な物だと知っていた。だからもし、誰かに盗られてしまったら。あのまま見つからなかったら。とカーティスは心配していたのである。それでつい、難しい顔をしてしまっていた。それを見たティファニーが「怒ってる」と、思い間違えたのだろう。

普段温和なカーティスが怒るなど、ティファニーには信じられなかった。だから、どう謝ればいいのか、分からなくなってしまった。と、涙ながらで話すティファニーの言葉からカーティスは繋ぎ合わせた。

ブライスはそつとティファニーの肩から手を外した。

「バカだねティファニー。僕はそんなことで怒ったりしないよ。……怒ってないから泣き止んで」

「……本当に？」

ティファニーは目を潤ませながら、小さな声で問い返した。

「ああ、本当さ」

微笑みながら抱きしめてやると、ようやくティファニーは落ち着き始めた。

腕を解いて立ち上げると、ブライスがそつとカーティスに囁いた。  
「……流石ですね。素晴らしい。このお嬢さまの憤懣を爆発せずに慰撫できるとは。屋敷中を探しても、貴方様に勝る方はいらつしや

いません。素晴らしい、実に素晴らしい。私も見習わせていただきます」

素晴らしい、素晴らしいと連呼するさまは、日頃巻き髪少女にどれだけ手を焼いているかをよく表していた。

ブライスさん、必死になりすぎると駄目ですよ。押しちゃだめです、引くんですよ。

と余計だろうが（ブライスはプライドが高い。ことに教育に関しては）つけたしてやると、ブライスは意外に、

「非常に参考になります。ありがとうございます」と一礼してみせた。

……その後ティファニーはベックフォード家に戻るのかと思いきや、

「ティファニー、今日はカーティスの屋敷にいたい！ だつてベックフォードに帰っても誰もティファニーの話聞いてくれる人いないんだもん……。ねえ、ブライスいいでしょ？」

来たときとは打って変わって、ティファニーは笑顔全開だ。

しかし、ブライスは顔面にレンガをくらったような顔をして、動かなくなっていた。これは恐らくショックを受けている顔だ。「話を聞いてくれる人がいない……？ おかしい、私は毎日聴いて差し上げているのに……」とブツブツ呟いていたので、カーティスは必死に執り成した。

「そんなわけないだろう、ティファニー。ブライスさんだつてちゃんと……」

「ううん。ブライスはすぐ『消灯の時間です。おやすみなさいませ』だけ言つてすぐ電気消しちゃうんだもん」

言葉を用意していたかのように、カーティスの言葉を途中でぶつた切った。

ブライスは完全に固まっているのを見て、カーティスはまた苦笑い。

……ベックフォード家からもエアルドレッド家からも了承を得て、ティファニーはエアルドレッド家で一夜を過ごすこととなった。しかし、結局はティファニーはベックフォード家に戻ることになった。

それは深夜のこと。

年が離れているとはいえ、カーティスとティファニーは異性なので同じ部屋で寝るわけにはいかない。そこで、ティファニーはジュリアナと一緒に就寝することになったのだが……。

カーティスが夢の真ただ中にいる中、扉を遠慮がちに叩く音がした。寝ぼけながらも何となくわかった。この叩き方はジュリアナだ。で、ジュリアナがカーティスに用があるとすれば……。

「……ティファニーか」

予感は見事的中。ジュリアナが部屋に入ってきたとき伴われていたのは。

「夜分遅くに申し訳ないわね。……でもティファニーが」

「……ティファニー。何があっただよ……」

ティファニーは何故か泣きじゃくっていた。目元は腫れているような気がする。

ティファニーが泣いて答えないので、ジュリアナが代わりに答える。

「……家が恋しいみたい。ブライス、ブライス、って呟いていたから……」

何だかんだ言って、やっぱり頼りになるのはブライスさんじゃないか。

「どうする？ ティファニー、ブライスに迎えに来てもらおう？」

ジュリアナが訊くと、ティファニーは僅かながら首を縦に動かした。

ジュリアナは執事を起こし、ティファニーの迎えを寄越すようにとベックフォード家に連絡を入れさせた。

ティファニーが馬車で帰るのを見届けると、カーティスもジュリアナも倦怠感が襲ってきた。それもそのはず、今は真夜中なのだ。しかもジュリアナはティファニーがグズっているのにも付き合っていたため、疲労は甚だしい。

「カーティス、もう寝ましょう。おやすみなさい」

「おやすみなさい、姉さま」

こうして2人はそれぞれの自室に引き上げて行った。

……というわけで、今日はぐっすり眠って朝寝坊していたかった。執事がその旨伝えてくれていたはずなので、カーティスもジュリアナも今日は朝食は遅くても構わない。

「……とはいえ、二度寝は出来ないからなあ……。よし、起きるか」

朝食を食べに食堂へ降りると、ジュリアナはもう食事を開始していた。

「おはようございます、姉さま。お早いですね」

「あら、おはよう、カーティス。実は私も寝られなくてね」

ジュリアナは微笑むと、カーティスに向かいの席に座るように促した。カーティスは素直にそれに従って椅子に腰かける。

ナイフとフォークを握って、食物を口に運ぶ。

今日の朝食は、朝遅いこともあって少なめに摂った（昼食が食べられなくなるので）。

「昨日はお互い大変だったわね。今日はゆっくり休んでちょうだい。

……あら」

「どうかなさいました？」

「ええ、今日は雪が溶けてるな、と思って」

ジュリアナが窓の外に視線を向けたので、カーティスもそちらを

伺う。

白銀の雪はほとんど溶けかけていて、新緑の草がちらほら見える……。って、

カーティスはまだ朝食途中なのに、ナイフとフォークを叩きつけるようにして食堂を飛び出した。

「え！？　ちよつと、カーティス！？」

ジュリアナの絶叫が後ろで響いていた。

「グレアム！　グレアム！　急で悪いけど馬車出してくれ！」

馬小屋で馬の毛並の手入れをしていたグレアムは、カーティスの声に振り返った。

「はぁ、いかなされたのですかな」

「いいから、今すぐ！　行先は前の森で！」

急いでいるというのに、このグレアムの鈍感さは若干じれたい。が、従順なグレアムはカーティスの顔色に気づき、弾かれたように慌てて馬車を出してきた。

カーティスはそれに乗り込むと、森へ急いだ。

白銀髪の少女

フェリシアがいる森へ向かって。



## 1 - 4 (後書き)

急いで書いたので、誤字・脱字があるかもしれませんが、大目に見て下さい。

『行くな、何処へも。……お前だけは』

『ああ、いるとも。私たちは、2人でひとつなのだから』

『……私たちにとって、幸せとは何なのだろう』

『はたして幸せはあるのだろうか』

『……いつまでも……共に』

\*\*\*

「ああ、もうここでもいい、降ろしてくれ！」

森まではまだ少しあるが、カーティス自身の疼きが声を作っていた。

えっ、ここで？ とグレアムが言うより早くカーティスは馬車から転がり出た。その弾みで、靴先を扉付近で思い切りぶつけてしまったが、痛みを知覚野にのぼらせる時間を与えている暇はない。

今日より澄みわたった空を、カーティスは生まれてから見たことが無い。いつもは寒くて凍えてしまいそうなのを防ぐために着こんだ服は暑くてしょうがないくらい。走りながら、身体中が汗を吹き

だしているのが分かる。

数日前まで雪しかなかったくせに、あんなに積もっていたのに。快晴だからとはいえ、何でたった半日程度で溶けかけようとしているんだ。

『私は厳寒の地でないければ生きられないのだ』

哀愁を漂わせながら、そう呟いた少女の顔が忘れられない。頭からこびり付いて離れない。

その姿を脳裏に思い浮かべると、不安で心配で。

雪の彫刻で創られたかの如き少女は、  
溶けていないだろう  
か、と。

「フェリシア！ 君はどこにいるんだ！？」  
カーティスの悲痛な叫びは、木々が空気を吸うかのように吸い取ってしまった。

\*\*\*

銃身から飛び出た弾丸は、真つ赤な血を引きずり出した。

一瞬だった。

生まれ持った素質と、鍛えぬいた反射を持っても視界に捉えることは出来なかった。

何がどうなったのかは理解できなかった。

片手で片眼にそつと手を当てる。その手に染みついたものをもつ片方の眼で見つめる。

そのとき初めて何が起こったのかが分かった。脳が、そして身体

中が全てを理解した。しばらくの間沈黙していた痛みは、患部に集中する。

『フェリシアッ！』

甲高い悲鳴が辺りに響くが、そんなことにまで精神を割けるほど、この身体が頑丈でないことを思い知る。

なんだ、所詮やはり寿命ある生物だったのか。それでは生み出された意味が。

『おのれ、よくも                   ！   思い知れ、下劣で下等な者よ！』

駄目だ、そんなことをしては。

薄れゆく意識の中で、感情に任せて暴れまわるもう一人の自分を見た。

そこにいたのは人々が魔界の住人と恐れ、蔑んできた獣の姿であった。

感情を制御する機能が備わっていない獣は、暴れ狂い己の全てを出し尽くすまで止まることはない。たとえ、同胞であったとしてもくい止めることは不可能だ。

誰であっても暴走を止められない。それ故に、獣と畏怖されるのだ。姿だけでなく、中身までも狂暴な血と細胞で埋め尽くされているのだと。

しかし、それではいけないのだ。

それでは、我らはこれからもずっと誰からも信用されない。

助かるために、生きるために、折れることは必要なのだ。怒りや憎しみといった感情を手放さなければならぬのだ。

『…………何ということ。やはりお前らには無理なことであつたか。

……咎人は消え去るほか道はない                   ！』

やめてくれ。そいつを私からとらないでくれ。

私にはもう何も無い。何も、誰かのぬくもりでさえも。

二人でずっとずっと共に寄り添い、生きると約束したのだ。だから……。

「私たちを離れさせないでくれ、孤独は嫌だ、独りにしないで……！」

\*\*\*

森を走り回ってようやく見つけた。

自らをフェリシア、と名乗り、雪のように冷たい少女を。

彼女のそばに慌てて駆け寄ると、白銀の髪の少女はカーティスに抱き着いた。というより縋り付いた。

「孤独は嫌だ、独りにしないで……！」

彼女は泣いていた。水が氷を溶かしてしまうかの如く、大粒の涙が頬を伝う。普段は真っ白な顔を真っ赤に染め、声を押し殺しながら泣く少女は、どこにでもいる普通の少女と変わらない。しかし、カーティスはあることに気付いた。

右眼からしか涙が出ていないのだ。左眼からは涙の一滴、いや液体の前兆すらない。

すると、カーティスに抱き着いていた重さが更に一段と軽くなった。ファリシアの身体の力が抜けたようである。

「フェリシア……？」

彼女は気を失っていた。右の睫毛に雫を残して。カーティスはそっとそれを拭ってやった。

どのくらい二人はそうしていただろう。

ふとフェリシアは自分の近くに温かいぬくもりを感じて目をそっと開けた。どうやら泣いていたようで右の目元が腫れて少し痛い。隣りにいたのは、

ああ、きてくれたのか。待ち焦がれた、再会の日。もう孤独に震えることはないのだな。

か細い指で、目を閉じている彼の顔にそっと触れる。壊れて消えてしまわないように、優しく。

自然と涙が零れてとまらなかった。ずっと逢いたかった。逢いたくて逢いたくて。でも、これからはずっと一緒に。もうこれからは。

「……………離れないからな」

「随分と大胆だね、フェリシア」

？ 声が違……………？

「！！？？」

フェリシアは目を瞠った。何故だ。さきほどまでここにいたのは……………。

「あつはは、女性にこんなに思い切り抱き着かれたことないからねえ。とりあえず離れる？ このままでいる？」

みると、身を乗り出して自分がカーティスに馬乗り状態に近くなっていた。フェリシアは慌てて飛びのいて、目の前の少年から素早く距離をとった。

「なななな、何で貴様がここに……………！？」

顔を林檎色に染めて、パニックを起こしているフェリシアにカー

ティスは笑って答える。

「いやあ、今日は晴天だから雪ごと君が溶けちゃわなかった心配になって飛んできたんだけど。いきなり飛びついてきたからビックリしたよ。そのまま君が寝ちゃうから、僕も君が目覚めるまで一緒に寝てたってわけ」

「……………」

フェリシアはどう反応していいかさっぱり分からず、ただただ閉口した。

「結構寝心地良かったよ、柔らかかったし。まさに白いクリームみたいにさ」

「ただただ黙れっ！ 私は断じてそんな破廉恥なことは……………！」

フェリシアは反駁する力を取り戻し、手近にあった、雪玉をカーティスに思い切り投げつけた。しかし、彼はそれをいとも簡単に避けてしまう。

「してないっていうの？ 自分から抱き着いてきたくせに？」  
そこを突かれると痛い。しかし途中からの記憶が、誰かに封じられてしまったかのように全くない。

フェリシアが撃沈すると、カーティスは笑って彼女を引き寄せた。抵抗してみたが、上手く力が入らない。

カーティスの腕にすっぽり収まると、フェリシアは途端に大人しくなった。剥き出しの華奢な肩が小さく震えている。

カーティスは雲が珍しく少ない澄んだ空を見上げながら、問うた。  
「……………つらいことがあったの……………？」

フェリシアは、肩を震わせるだけで何も言わない。右眼から転がり落ちた涙が、ポト、と地に落ちる。

瞬間、雪が刃のように堅く鋭く凍りついた。それは線が走るように伝線し、辺りを雪ではなく氷に造り変えていく。

スケートリンクになった場を、カーティスはしばらく瞠目していた。しかし少し時間が立つと、シューツと音が鳴り初め 水は地に吸い込まれて、辺りは完全に元の雪景色に戻った。

「………… フェリシア、そういえばまだ君にブローチのお礼をしていなかったよね。何か欲しいものとかない？」

フェリシアが落ち着き始めるのを見計らって、カーティスは小さく声を掛けた。

フェリシアが腕の中で動かず喋らずなので、カーティスは何か外したのだろうか、と少し心配になってきた。

「…………… い」

「え？」

余りにも突然で消えそうな小さな声だったので、カーティスはフェリシアの声を聴きそびれた。

もう一度言って、と頼むとフェリシアは少々不機嫌になったようで、カーティスの胸を思い切り押して彼の腕から逃れた。

濃蒼色の瞳は真っ直ぐに見据える。そして、先程のべそとは打って変わって居丈高に声を張り上げた。

「私の願いはただ一つ！ 探してほしいことがあるのだ。お前、私と共に探してくれないか」

白銀の髪が、一本一本獣のように逆立ってみえた。



## 1 - 5 (後書き)

更新のろまですみません。  
期末やっとかさ終わりました！  
もう勉強なんてしたくないっ！

人間など絶対に信用しない。できるはずがない。

何故なら自分から大切なものを奪ったから。人間がに足を踏み入れたせいで、彼の森から生物は消えてしまった。我ら種族を残して、白銀は我らの象徴であり、誇りである。それを失わされた。愚劣な奴らにだ。しかも奴らは、あいつまで。あいつにまで傷を負わせたのだ。

あいつは今もきつと何処かで、独りで耐えているのだろう。あの時交わした、実現しない約束を守るために。

「……さま。お客さま。ご注文の品をお持ちいたしました」

ハッと顔を上げると、盆に飲み物を乗せた女性店員が立っていた。肘について考えごとをしていたので店員が来たことに気付かなかったようだ。女性は職業柄上、終始にこやかな表情を保っていたが、眼が笑っていないかった。どうやら相当イライラしたらしい。

すみません、と小さく首を下げると店員は勝ち誇ったような笑みを浮かべて去って行った。サービスが命の喫茶店のくせに。どんな賤けされてんだ、と店員が去った方向を睨み付ける。その時目が合った小さな女の子が、ビクッと顔を引き攣らせて泣き出した。母親らしき人が「どうしたのエメリン。何怖いものでも見たの？」

癒されるために来たっつーのに、何でこんな胸クソ悪い目に。

気分を害し、運ばれてきた熱い紅茶を一気に飲み干す。バン、とカップをテーブルに叩きおくと、周りの客が一斉に静まり返った。好奇心のある者は何事か、とチラチラとこちらを伺う。

見るんだったらこそこそしないで、凝視すりゃあいいじゃねーか。

とささくれながら大股で店を出る。ちよつとした気まぐれでガラスドアごしに店内を見回すと、皆安堵したかのように笑顔で談笑を再開していた。

人間はこれだから嫌なんだ。度胸もないくせに、安心と平和だけを貪り求めやがる。しかも『自分さえよければいい』としか考えてないから余計に性質が悪い。

眉根を寄せながら街を歩くと（この街は人々で賑わって、酷いときには身動きがとれなくなると有名）、一瞬で自分の周りから人だかりが消えた。男女問わず道の端で立ち止まり、こちらを凝視しながらヒソヒソと囁きあっている。そいつらの顔の醜さといったら！こんな奴らの顔がよく劇や店のポスターにのれるな。人間社会の『美』の基準は、全くもって理解不明である。

舌打ちをしながら歩き続けると、やがて目当ての店についていた。

相変わらず陰気くさい店だな。

明るく賑わう店たちから弾きだされたように、ひっそりと開店看板を掲げているこの店。

日陰に建設されているためか、湿って苔や蔦が群がるように蔓延っている。掃除していないのかと不潔に思われがちだが（思う人はいのだろうか）、『幽霊屋敷』と噂されるこの店にはこの程度の方が、適格な雰囲気醸し出していると思う。

帽子の上に落ちてきた埃を払い落しながら、腐りかけている木のドアを押した。するとギギギ……、と不吉な音を立ててドアは珍しい客人を招き入れた。

「おお、旦那あ。遅かったですねえ、待ってたんですよ」

滅多にない来客に顔を綻ばせるは、この店の亭主と思しき男。中年で中肉中背。眼は萌黄色の若干つり目。笑うと出来るえくぼが、彼を狐に近づけさせる。

「あれは終わったか」

声のトーンを落として喋るとたいてい怖がられるのだが、この狐亭主は全く恐れない。

「ええ、終わりましたよ。今お返しいたしますね」

使い古した木の香りがする木製の棚がある。その棚には、怪しげな雰囲気の商品や鉱物が無造作に収納されている。いや、無造作ではないようだ。その証拠に狐亭主はそこにひっこむと、迷わずひとつの置き場から何かを手を取った。

それを丁寧に大事そうに、血管が浮かび出たごつごつした手に包む。

狐亭主が歩くと同時に、所々苔が生えた木の床がギイギイと音を立てた。

「どうだ」

すると狐亭主は、指に鉱物のような物を挟んで透かしながら、

「はあ、鑑定はしてみたんですがねえ。何せここの機械も古いですし、何より俺も見ただことがねえんでねえ。店中の図鑑を漁ったんですが、判別がつきませんでした」

客人がギロツと睨んだが、狐亭主は意に介する風もなくのんびりと笑って見せた。

「まあ俺にはよく分かりません。鉱物学者の女房なら分かったかもしれないですがね。残念なことに15年ほど前に死に別れてしまいました」

全く表情を変えずに、ニコニコ顔の狐亭主。客人に雪で創られたように白く染まった鉱物を手渡す。客人はそれを受け取る。

そのとき、狐亭主は瞠目した。

穢れのない純白の鉱物が、客人の細長い指に触れた途端、血のような濃い赤に染め上げられていったからだ。

普段は驚きを顔に出すことはないのだが、流石に今回ばかりはそうはいかなかった。

息をのむ気配が伝わったのだらう、客人は美麗な顔を酷く歪ませた。

狐亭主は場を執り成そうと、努めて明るい表情と声で、

「いやはや、素晴らしい鉱石ですな。貴方さまを主人と認めている  
んでしょな。それにその色は旦那の赤い髪とお揃いで……」

その時、狐亭主は目の前で確かに見た。

幼い子供のころ、母にいつて聞かされ恐れ震えあがった『悪魔』  
を。

もう近頃は全く無縁だった焦りと汗が大量に噴き出た。

「……赤髪とお揃い、か。途中で口を噤んで正解だったな。……

もし『似合っている』とでも言っていようものなら……」

お前は今、屍と化していたぞ。

赤髪が逆立ち、かぶっていた黒い帽子が床に落ちた。

切れ味最恐の眼のナイフで屠られたように、狐亭主は己の内臓か  
ら血が噴き出してきたかのように思えて、思わず片手を腹に当てた。

燃え盛る火の髪と夜の月のような冷淡な濃蒼色の瞳が、こちらを  
噛み殺さんとはかりに激しい憎悪を丸出しにしている。

狐亭主は恐ろしさのあまり、しばらく沈黙していた。しかし悪魔  
だったとしても客は客。汗をさり気無くふき取ると、軽く会釈した。

やがて赤毛の客人は、あけすけの憎悪を引っ込めると平常の顔に  
戻った。

狐亭主は少年のようだと思った。客人は背の高さと体格の良さで  
歳が読みにくかったが、顔には少年の香が残っている。『悪魔』を  
見た後だったので、落差が大きかったためだろう。

客人が帽子を拾い上げて、目深にかぶる。そのまま踵を返して木  
の（腐りかけ）ドアを押したので、狐亭主は慌てて声を掛けた。

「ありがとうございます。またのご来店お待ちしております」  
頭を下げ、眼でちらりと客人を見遣る。

すると客人はもう既に店を去ったあとだった。

三脚テーブルに、鉱物鑑定代を置いて。銀のコインが何かを伝え  
るように、眩しく光っていた。

\*\*\*

「何なんだよ、フェリシアの奴っ！」

家路につき屋敷の自室に戻ったカーティスは、珍しく荒れた仕草で扉を閉めた。

誰に対して愚痴かといえば 言わずもがなの白銀の髪の少女、フェリシアだ。

あのあと フェリシアに抱き着かれ、「探してほしいことがあるので、一緒に探してくれないか」と言われたあと。

フェリシアにはこっぴどい態度ばかり受けていたので、カーティスは心が寄つてくれたのかと正直嬉しかった。

しかし彼女は突然地面にうずくまった。左眼を強く押さえていた。詳しいことは不明だが、どうやら左眼が急に痛み出したらしい。

カーティスは慌てて抱き寄せて顔色をみようとしたが、フェリシアはぐったりしていた。意識がなかったようであった。カーティスは驚いて、飛びつくようにフェリシアの脈を調べた。首はあまりにも冷たかったので、手首に触れて脈を計った。何処が脈打つ血管なのかいまいち分からなくて、しばらくあたふたしたが、指先に伝わる鼓動を感じると、ほうっと息を吐いて安堵した。

それからしばらく、フェリシアは目を覚まさなかった。カーティスはフェリシアの長い睫毛を眺めながら、複雑な想いで彼女が目覚めるのを待った。

カーティスは退屈になったので、フェリシアの長い白銀の髪を弄んでいると、

『……何をやっている』

フェリシアが、不機嫌そうに非常に不機嫌そうに低い声を出した。閉じていた瞳は両方ともぱっちり開いていて、カーティスをぎろ

りと睨んだ。

カーティスは苦笑いしながら、『あんまり綺麗だったから、ついごめんね』と謝った。

すると、フェリシアは力のない細い手でカーティスの腕を振り払った。全く痛くなかったが、カーティスは思わず腕を引っ込めた。フェリシアのその手は、はっきりとカーティスを拒絶していた。

フェリシアは立ち上がると、カーティスに背を向けた。そして小さく、

『……去れ』

カーティスは聞き間違いかと思った。だってさっきまであんなに僕に、心を許してくれていたじゃないか。なのに、何故急に手の平を返すようなことを言うの？

愕然とするカーティスにフェリシアはさらに追い打ちをかけた。

『去れ、と言ったのが聞こえなかったのか？……私はお前が』

そこでいったんフェリシアは言葉を切った。

ファリシアはくるりと半回転して、カーティスに向き直った。

『嫌いなのだ』

声の軸を微動だにせず、はつきり彼女は言い切った。

その瞳は、何かを強く激しく恨んでいるような、もう二度と取り戻せない何かを悼むような、複雑な色を帯びていた。

## 1 - 6 (後書き)

大変遅くなりました。

理由は沢山あるのですが……。

一つの大きな要因としては、校内駅伝・マラソン大会があったからです。

寒い中の長距離は大嫌いです。

来年もあるなんて、嫌だああああああ

!!



その日、彼女は階段を上っていた。両手に二冊の本を抱えて。

長い長い階段をようやく登り終えると、ジュリアナは軽く肩で息を吐きながら、部屋の扉を細い腕で開けた。

途端、視界には沢山の本たちが飛び込んでくる。

そう、ここはエアルドレッド屋敷の図書室。図書室にしては広すぎる気もするが、隙間は全くなく本棚が部屋の空間すべてを埋め尽くしている。

「同じ年頃の子弟なら遊びほうけているのに。あの子が無駄に時間を潰しているのは見たことが無いわ」

上までびっしりと本が詰まった、高い本棚を見上げながらジュリアナはほつと息をついた。彼女が気に病んでいるのは、弟・カーティスのことである。カーティスはずっと勉学に励み（まくつて）、最近よく図書室に通っているというのを、弟専属の侍女に聞いたのである。図書室に来るたび、弟の熱心さを想いだし、頭が下がる。

ジュリアナは借りている本があつたので、図書室へ返しに来た。別に期限などはないし、気に入った本ならば返さなくても支障はないが、ジュリアナは「もし、私のほかに読みたい人がいるかもしれない」と考え、毎回毎回返しにくるのだ。兄たちによく「あれだけ膨大な本があるのだし、使用するのも我が屋敷の人間だけで興味は皆違うのだから、そういう心配はしなくていい」と笑うが、ジュリアナはそういう問題ではないと思っている。

大きく広い、寂寥感溢れるこの図書室。静まりすぎて怖いくらい。ジュリアナは舞踏に関する書籍を、元の本棚に戻そうとする。しかしジュリアナの背丈より高い位置なので手どころか指先すら届かない。前は背がおそろしく高い侍女に取ってもらったのだが、今日は一人で来たのだ。踏み台があれば、問題は解決するのに。と執事たちに提案してみたのだが「足を踏み外されて、御怪我でもなされ

ては危険です。ただでさえ、貴婦人の靴は不安定ですのに」と一蹴された。

「……んっ。……え、あっ」

ジュリアナの呻きは途中で驚きに変わった。

「兄さま！」

ジュリアナの後ろに兄がいた。一歳年上の次兄のスタンレーだ。ジュリアナが届かなかった本を元の位置に戻してくれたのだ。

「え、あら、ランスロット兄さまも？」

スタンレーの後ろに長兄・ランスロット（ジュリアナとは三歳離れている）の姿もあり、ジュリアナは驚いた。次兄のスタンレーは背が高く体格がいい。ランスロットは、その背に隠れるような格好になっていたので見えなかったのだ。

しかしこの二人が共に図書室を訪れるとは珍しい。ランスロットは次期当主ということで、それに恥じぬよう研鑽を積んでいる。スタンレーは軍人になるべく、過去の戦記で戦術を学び、最近は剣や乗馬に勤しんでいる。聞いたところによると、三か月後に行われる軍学校の受験を受けるらしい。

そんな忙しい二人が揃って図書室を訪れるとはどういう意図であろう。まさかジュリアナを助けに来たわけではあるまい。

「どうしましたの、お二人揃って。何かお探しですか？」

ジュリアナが尋ねると、ランスロットが一步を踏み出した。エアルドレッド家遺伝の金色の髪が踊る。背こそ弟のスタンレーに劣るが、その威厳に満ちた顔つきと態度は周りの者が安易に近づけない、堂々とした雰囲気がある。スタンレーとはまた違う風格である。これこそ伯爵家当主に相応しいといえよう。

「いや、別にたいしたことではないのだがな。スタンレーと意見が分裂してしまっ」

分裂？ 何か揉めるようなことがあったのだろうか。

ジュリアナが心配そうな怪訝な表情を兄たちに向けると、ランス

ロットが大仰に胸の前で手を振った。

「違うぞジュリアナ。そんなたいそうなことではない。スタンレーがぐちぐちしつこいから、兄としてこいつの間違いを正してやるうと思っただけ。書物で白黒はつきりつけるためにここに来ただけ」

「そうなのですか。では私はお邪魔にならないよう、これで失礼致します」

一礼して踵を返そうとしたジュリアナを、ランスロットは素早く引き留めた。

「ジュリアナがいたのならわざわざ調べるまでもない。ジュリアナ、聡明な妹としてスタンレーの無知をなおしてやってくれ」

「はあ……。私がお答えできることであれば」

兄さまに指摘できる場所なんかこれっぽっちも見当たらないのに。ジュリアナは二人の兄を交互に見やりながら、困惑した。

「それで、どのようなことでしょうか？」

ジュリアナが不安げに訊くと、二人の兄は声を揃えた。

「月さ！」

「つきい？」

思いもしなかった単語に、ジュリアナは思いつき怪訝な声を出してしまった。それから、はたと気づいて片手で自分の口を塞いだ。もう成人近い二人の兄が何故そのようなことで揉めるのかと、ジュリアナは首を傾げた。

「ジュリアナ、月は東か西か、どちらから昇る？」

訊いてからランスロットは勝ち誇ったような笑みを、スタンレーは真摯に硬い表情を浮かべた。

迫られた華奢な妹は、今だ事態がうまく把握できず当惑しながら己の知識を探った。

「東から昇り、西へ沈む……というのが常識ではないかと……」

敢えて直接的な断言は避けたが、ランスロットは勝利者めいた口調で、後ろに突っ立っていた弟を振り返った。

「ほらみる！ 俺が正しかったじゃないか」

スタンレーは味方がいなくなったことにないしてか、自分の意見が違っていたことにたいしてか、ギリリと頑丈そうな歯で歯ぎしりした。

しかしすぐに悔しそうな態度を捨て、お門違いにジュリアナに反駁した。

「でも太陽は東から西に沈むんだろ？ だったら月は西から東に沈まないとおかしい」

？ 何でそうなるの？

ジュリアナはどう返答してよいものと詰まった。ランスロットも弟の主張を聴いていただろうに、理解できん、と苦笑い。

しばらく考え込んだジュリアナは、試しにスタンレーに訊いてみた。

「もしかして兄さまは、太陽と月を同一の存在だと思っていらつしやらない？」

流石に違うわよね。と自分が愚問をしたことに申し訳なさを感じたが、

「えっ、同じじゃないのか！？」

……この兄は、実に面白い人であることが分かった。

「……」ですから、月は東から西へ昇るのです。正しくは私たちがそう見えているだけですけど」

説明だけでは分からぬだろうと、ジュリアナは懇切丁寧に手振りまでつけて結論づけてやった。

スタンレーはどうやら太陽と月が同じだと勘違いしていたようであった。昼間は太陽、夜間には月に変化し地上を照らしている、という具合に。

始めこそは腑に落ちない、という雰囲気が出ていたスタンレーであったが、ジュリアナの説明を聴いてようやく納得したらしい。ふむふむ、と頷いて「説明ご苦労！」と大声で自分が理解できたこ

とを告げた。もしかすれば、羞恥心を隠すためだったかもしれないが。

二人の呆れた苦笑いに、しばらくしてだんだんスタンレーは萎れてきた。ランスロットは苦笑いをやめ、兄としてやんわりと、しかし厳しく叱った。

「お前は軍人になるのだろうか。この程度のことを知らなかったといことは勉強不足ということだ」

しかし、軍人にはそのような知識を得る必要がありません。

兄の喝に完全に俯いてしまったスタンレーは、いつもの威厳を忘れてきてしまったかのようにだ。しかし、口調ははつきり険を帯びていた。

「何を言う。もし月や星の知識もなく、方角を示す磁針も無かった場合、孤軍と化したときどうするつもりなのだ。例え一人になったとしてもお前は自分の位置が掴めるのか」

諭すランスロットにも険がある。ジュリアナは兄弟喧嘩でも始める気なのか、とハラハラした。

「だいたいお前は甘い。自分が貴族出身だと舐めているのではないか？ 確かに今、貴族は士官の地位をおかた約束されている。しかしそれも今だけだ。何故なら最近農民の受験者も増えている。無能な貴族を優遇するほど、この国は腐ってはいないはずだ」

それに、と彼は続ける。

「お前もよく分かっているだろう。無能な将が軍を率いればどうなるか。たった一人の一つの判断が、何万人もの尊い命を奪うことだってあるのだ」

命の話を持ち出されて、スタンレーはぐつと言葉を失った。過去の戦記を調べ、頭に置いていただけに鋭く刺さったにちがいない。

しかしただ萎れているだけの人物ではない。すぐに立ち直り、顔を上げランスロットに宣言した。

「兄上の仰られた通り、俺は油断していました。これから武学だけでなく、他の学問にも尽力します！」

スタンレーはさつと腰を下り、軍人の鑑のような一礼をすると図書室を大股に去って行った。

「あいつは素直でいいな。軍人だけに限らないが、他の意見を聞き入れられる奴は立派だ」

ランスロットは弟が去って行った方向を見ながら、表情を緩めた。それを見て、びくびくしていたジュリアナは安堵の息を吐いた。

「もう、兄さまたちたら。一時はどうなることかと思いましたが、隅っこの妹の存在を忘れて怒気丸出しにしないでください」

半べそ状態のジュリアナは、ランスロットを軽く睨んだ。

「ああ、すまない。つい熱が入ってしまったな。だがあいつには判ってもらわなければならないことだったのだ」

妙に寂しそうに話すランスロットに、ジュリアナは思わず口を開いた。

「でもスタンレー兄さまはよく御存知だったと思いますわ」

あれだけ戦術を勉強している方ですもの。

「……だろうな。あいつはいずれ、部下や幕僚の意見も大事にする良い上官になるだろう。それが良い指揮官となるかどうかは別だが」

すこしの沈黙をおき、遙か頭上の天井を見上げる。

「……我が国の軍は、新鮮な血を欲している」

突然の兄の発言に、ジュリアナは意味を掴み損ねた。

「それは、どういう」

意味ですか、と訊く前に聡いジュリアナは理解した。

「戦争に、なるのですか」

知らずに声が震えた。

戦争になれば、この国は、兄は……？

「そうだ。それもそう遠い未来のことではない。だから貴族であろうと農民であろうと、とにかく若い兵を必要としているのだ」

否定してくれ、とジュリアナの願いもむなしく、ランスロットはきっぱり言い切った。

ランスロット曰く、戦争になったときの為にいち早く優秀な兵を生み出さねばならない。そのために軍学校は官費になったという。毎日食うことすら危ぶまれる農民は、ただで衣食住が保障されている軍学校に入学を決意するらしい。

しかし畑を耕していただけの農民は、国や王への忠誠が薄い。中にはまったくいない者もいる。

その農民たちの訓練や士気をあげるためには、多くの時間を必要とする。

だから兵への教育は一日でも早い方がよいのだ、とランスロットは言う。

『国を護るのは、この国に住んでいる者だ』

ランスロットは厳かに呟くと、図書室を出て行った。

図書室に一人残されたジュリアナ。

想像もしていなかった事実に打ちのめされた。

図書室に返しに来た二冊の本。

一冊は舞踏の本。そしてもう一冊は勉強の合間に休憩するための、恋愛小説だった。

自分がいかに世の中の出来事に無関心なのが、証明されたようだった。

次兄が月のことを詳しく知らなかったことに対して、ジュリアナは心のどこかで小馬鹿にしたわけではないが「そんなことも知らなかったの？」と思っていた。

が、違った。二人は目指しているところはそれぞれ違うが、自分たちなりに国について思案していて、そしてそれに自分がどう関わっていくのかを明確にしようとしている。

ランスロットはスタンレーを無知だと叱った。そしてスタンレーは屈辱だろうが、無知を認め、今以上に勉学に励むと言った。

じゃあ、私は？

私は何をしていた？

兄さまたちは多忙に追われても思案を続けていた。でも私は自分のことだけ考えて、何も考えていなかった。  
あまつさえ、空いた時間に娯楽なんて。

考えることをしない人間が娯楽を嗜むと、『楽』だけを追求するようになるんです。

かつて、あまりに勉強をしすぎなカーティスに訊いたことがあった。「たまには頭を休めて、楽しい物語でも読めばいいんじゃない？」

その時カーティスはそう答えたのだった。  
今考えれば自分の発言がどれだけ幼稚だったのか。

カーティスは別にジュリアナのことを指したのではないだろうが、「考えない」人間はまさに自分のことだ。

時間は人を待つてはくれないのだ。

その貴重な時間の間にどれだけ成長するのか。

きっとそれは、その人間がどれだけ思考したかを表す。

ジュリアナは、兄が戻してくれた一冊を四苦八苦しながら抜き取った。そして「娯楽」を一番奥の本棚になおした。

\*\*\*

「白銀は私たちの誇り。それ以外の色はどれほど華美であろうと、美しくはないのだ……」

きつと、きつとまた逢える。

もう何色でもいいから……。





## 2 - 1 (後書き)

これでエアルドレッド4兄弟、全員が書けました！。  
皆可愛いです。

大人になっても子供でいてほしい。

ちなみに上から、

長男・ランスロット(19) 次期伯爵家当主。

二男・スタンレー(17) 軍人志望。

長女・ジュリアナ(16) もうすぐ社交界デビュー！。

三男・カーティス(13) ガリ勉少年。

……カーティスだけなんか酷いですね。  
でもそれもまた愛情(?)。

あの日の快晴が嘘のように、最近はずっと空の機嫌が悪い。  
フェリシアの機嫌も大変悪い。何故だかは自分でもよく分からないが、とにかくいらいらするのだ。  
思い当たる原因はきつと。

『嫌いなのだ』

冷たく言い放った一言。

カーティスという少年は、ナイフで挟まれたような悲惨な表情を浮かべた。その後カーティスは去って行ったが、あの寂しそうな背中が忘れられない。

本当の所を言うと、「始め」は傷つけるつもりはまったくなかった。ただあるとき。あときに限って左眼が猛烈に疼いた。まるで歩み寄ったフェリシアを止めるかのように。

左眼の眼痛で意識が遠のく瞬間、フェリシアの脳裏にあるものが走馬灯のように駆け巡ったのだ。

白銀が白銀以外の色に染まる。いや、染められていく。

それをただ眺めているしかない、無力な自分。大切に、この世で最も大切に離れたくなくて、愛していたものがあっけなく崩れる怖さ。

抵抗する力はお互に残っていない。残っていたとしても無効化される。何故なら、相手は我らよりも強いから。ねじ伏せられる力があるから。

我らを消すのはそいつだが、事の発端は別のところにある。

人間だ。

そいつは悔しいほど上手くしくみを作っていて、そいつを恨もうにも恨めない。だから我らは我らよりも弱い人間にしか怒りを向けることが出来なかった。

我らは別に人間を殺したいほど憎んでいたわけではなかった。しかし人間はあろうことか我らを敵視し、武器を持って森に入ってきたようにする。

我らはそれを阻止したかった。平穏な生活を守りたかったただけなのだ。

我らは二つで一つ。しかしその片割れは、掟を破った罪に問われ、<sup>誇り</sup>白銀を奪われてしまった。

恨むべくは人間。

ずっと胸に人間への憎悪の炎を鋭く燃やしながら生きてきた。

意識を取り戻したとき、傍にいたのは人間だった。

私たちを引き裂いた原因の、諸悪の根源の人間！

心の底から憎いと思い続けてきた人間。眠っていた本能のようなものが私に制御を施した。「これ以上、関わるな」と。

ほんの気まぐれで、少年の探し物を見つけてやってから始まったささやかな関わり。初めこそはつつけんどんだったが、どんどんと心が隔てていた壁を溶かしていくようで。でもそうではなかったのだ。

彼もまた私を孤独に突き落とした人間。我が種族と交わりを持つてはならないもの。

ずっと共に生きよう、と誓った私たちの愛を踏みにじったもの。

だから蹴った。『嫌いなのだ』と。私とお前は一生かわること  
は出来ないという本能のささやきから。

これでよかったのだ。これで。

しかし心の片隅に何かが引っかかる。本当にこれでよかったのかと。

あの少年は、私を孤独から救い出してくれる存在になったはず。あいつの代わりにはならないだろうが、一緒に語り合える存在になったかもしれない。

そう考えてしまう自分はどれだけぬくもりに飢えているのだろうと思う。人間が嫌いなくせに、人間が去ってしまえば寂しいと感じる。去らないでくれ、私の傍にいてほしい、とまで思う。

馬鹿馬鹿しい矛盾だ。

馬鹿馬鹿しいが、自問自答を繰り返してしまう愚かな自分は消せない。

『矛』をとるのか『盾』をとるのか、と。どちらを選べば良いのだろうと。

今までの感情からならば、迷わず人間は敵だと答える。勿論今でもそう思っている。

しかしその一点しかない凪いだ海に、大岩が飛び込んできたせいでどうすればいいのか分からない。元の凪いだ海に戻す方法が皆目分からないのだ。

人間が敵か、否か。

それは天秤に均等に釣り合っている。だからどちらかに小石の欠片でも乗って少しでも傾げば、決まってしまういそうなくらい、どちらも想いも捨てることはできない。

私はあの少年がどうしてくれれば、満足するのだろう。天秤に小石が乗るのだろう。

こういうときに、あいつがいてくれれば。

と考えるが、それはおかしいと自分で自分の頭を殴りたくなる。だってあいつがいたら、あいつ一筋なわけ。今はあいつがいなから、人間を受け入れるべきか、否か迷い悩んでいるのだ。

「……どうすればよいのだ……。どうすれば……」

声に出してみたが、何がどう矛盾なのかが分からない矛盾は解けるはずもなかった。

\*\*\*

雪はまだ降り続いていて、窓からだけで分かる寒さは、部屋の中にも入り込んでくる。

火を焚き、上着を重ねるが、自然の厳寒には完全には打ち勝てそうもない。

最近は屋敷中が何となくピリピリしている。

原因は次兄・スタンレーの軍学校受験だ。

この寒さと雪で、いまいち乗馬や剣の練習が上手くないのでスタンレーは苛立ち気味。それが屋敷の執事や侍女に伝染してしまっているのだらう、とカーティスは推測する。

スタンレー兄さまは確かに頭がよく切れるけど、ちょっと短気なところが玉に瑕なんだよね。

というのは長年共に（といってもあまり顔を合わすことはないが）この屋敷で過ごしてきた弟としての評である。

読んでいた政治・経済の本から顔を上げると、小窓のサッシに雪が積もっているのが見えた。そのたびに、繊細の心のカーティスの顔が曇る。「白銀」はあの不思議な少女を思いださせるからである。ついでにその少女にはっきりと「嫌いだ」と言われたことも思い出す。

「僕、フェリシアに何かしたっけなあ……」

過去の自分の素行を手繰り寄せてみるが、それらしき害のある行動はない。……と思う。

「嫌いだ」と言われた日は憤ったが、冷静になった今は何故かあの

シニカルな少女に逢いたくてたまらない。

あんな態度を受けておいても嫌いになれないなんて。我ながら実に不思議である。

あの森にもう一度行ってもいいのだろうか。もう一度フェリシアと話してもいいのだろうか。

悶々と考えを広げてみるが、はつきりとした答えは見つからず曖昧だ。

自分の気持ちに正直になれば、逢いたい。けれども、別れが最悪だっただけにどうしたものか。

こればかりは、どの教科書にも書いていない。

「カーティスさま。お客さまがお見えになりましたが、いかがいたしましょう」

カーティスの自室のドアを叩く音が、彼を現実に取り戻した。

客？ そんなの聞いてないけど。と少々うんざりしたが、

もしかして、フェリシアか！？

確証はないが、そんな思いつきがカーティスの胸を駆け巡る。カーティスは小躍りしそうになったが、必死でそれを食い止めながら、ドアを開けた。それからドアの叩いた侍女と共に客人の待つ玄関へ向かった。

待っていた客人は、残念ながらカーティスの思惑とは違った。

「カーティス　！」

思い切り飛びついてきたのは、

「ティファニーじゃないか」

従兄妹の巻き髪少女である。後ろには当たり前女性の教育係・ブライスが控えている。

「どうしたんだい？」

カーティスが訊くと、巻き髪少女より早くブライスが反応した。ずれてもない黒縁メガネを、くいつと押し上げながら、

「申し訳ありません。ティファニーお嬢さまがどうしてもこちらに遊びにきたい、とききませんので。スタンレー様のお邪魔になるから、とお咎めしたのですが」

例え怒っていても申し訳なさを感じていても、表情と声は淡々としているのがブライスの特徴だ。内心、ひやひやしていることだろう。

そんな教育係の苦勞を知ってか知らずか、色んな意味で幸せな巻き髪少女がニコニコと太陽のような笑みを放っている。

カーティスの誤解（正しくはティファニーの誤解していただけた）が解けたあの日から、ティファニーは更に人懐っこくなった。

ティファニーは可愛いのでそれでいいのだが、場所問わず抱き着くのはいかなものかと思う。

とはいえ煩わしいわけではないので、小さな巻き髪少女を抱き上げてやる。

ティファニーは微笑んで、カーティスの首に小さな腕をまわす。柔らかく華奢な身体からは、花のような芳香が漂う。絹のような栗色の髪が顔に触れる。くすぐったいが心地よい。

「ねえカーティス。ティファニーご本が読みたいの。このお屋敷の図書室は、ティファニーのお屋敷の図書室よりうんと大きいんですよ？ ティファニー、見てみたい！」

カーティスの腕で、キャッキヤとはしゃぎ出すティファニーにブライスは「連れて帰るのは無理」と判断したらしく、きっちり一礼してカーティスにティファニーを委ねた。

「申し訳ありませんが、カーティス様。お嬢さまをよろしくお願い致します」

分かりました。とカーティスは了解して巻き髪少女を下ろした。ニコツと微笑んだ巻き髪少女とカーティスは手を繋ぐ。そのまま二人は図書室へ向かった。



そのときかすかに開いていた玄関から、白銀の雪が入り込んだ。  
ブライスの閉めが甘かったのだろう。

気づいたブライスが慌てて閉めたが、閉めたときの風の影響で、  
雪は玄関の隅に移動した。

しばらく冷気を辺りに放っていたが、やがて力尽きて溶けた。

## 2 - 2 (後書き)

指先冷たい……。

一日中暇を持て余していた露草です。

「葛藤」というテーマのもとフェリシアはさんざん悩んでいます。  
何でちゃっちゃとはつきりしないの？ とうんざりな方もいらっしゃるかもしれませんが、これがフェリシアであります。

今はまだお互い気持ちが上手く通じ合っていないませんが、いずれ……！！

ティファニーとブライスが書けて、非常に満足している露草でした。

寒さと冷たさが凝縮された風が辺りを吹き抜けていく。

枝にかりうじて引っかかっていた雪は、枝が揺れるので地面に落下する。しかしその枝の色は見えない。何故なら雨は大量に振り続けていて、すぐに場所を白銀で覆い尽くしてしまうからだ。

……太陽はいつ出てくるんだろ。

元々寒い地方で、その上真冬なので始終雪が降りやむことはない。雲に隠され姿を現さない太陽を憂いて、エアルドレッド伯爵の三男・カーティスは浅くため息をついた。

ちなみにため息をついたのは、太陽と蒼穹が恋しいからだけではない。

フェリシアだ。

外のあちこちに降り積もる白銀の雪が視界に入るたび、癖のない白銀の髪 of 少女を否応なく想いだしてしまう。

『嫌いなのだ』

そう突き放されても、離れたくない。ずっとあの少女のもとにいたい、と気づけば勝手に願ってしまっている自分は、おかしいのだろうか。

はふ、とまたため息。

今日は今朝からこんな状態で、朝食時には母に「カーティス、具合でも悪いの?」と心配させてしまう始末。カーティスは「いえ、違います」と慌てて否定した。本当に体調が優れないのならともかく、一人の少女についてあれこれ悩んでいるのかと知られれば。別にどうってことはないかもしれないが、カーティスは嫌だ。兄に苛

立ち発散としてからかわれるのは目に見えているし、何よりフェリシアの存在をこれ以上広めたくないのだ。

そんなこんなでどうしても勉強をやる気がおきないので、今日は休養をとらせてもらうよう、教師たちに便宜をはかった。

ごろん、と自室の寝台に寝転がる。眼をぱちぱちしたり、綺麗に整えてある髪をぐしゃぐしゃにかき回してみたり、意味もなく指で指を触ってみたり。誰も見ていないから良いものの、完全に挙動不審だ。

しばらく意味不明な行動を続けていたが、カーティスは突然雷に打たれたように跳ね起きた。

そしてそのまま、屋敷の裏側に駆けて行った。

\*\*\*

枯れ草のおいが辺りの空気に紛れ込んでいる。

小屋の中から、シャッシャと何かを梳くような音が響いてくる。

ここは馬車の馬が生活し、御者たちが馬の手入れをしている馬小屋だ。

カーティスは引き戸を引いて、中に入った。

瞬間草の香りが強く強く鼻をくすぐる。滅多に嗅ぐ匂いではないが、この匂いはとても落ち着く。

御者のグレアムはいるかと、頭を動かして探す。すぐにお目当ての人物は見つかるが、グレアムは馬の毛並を一心不乱に梳かしている。闖入者には気が付かない様子だ。

しかし勘の良いグレアムは、すぐに気づき、ブラシを持った手を止めた。

「おや、これはこれはカーティスさま。どこかお出かけなさるのですね、お待ちください。すぐに馬を出しますんで」

カーティスは遠出の用があるときしかここを訪れないので、グレアムは今回もそうだったのだと思う。

「いや、今日は違うんだ。用は用なんだけど……。その……。そっ相談！ グレアムに！」

しどろもどろになりそうだったので、一気に言い切った。

グレアムは手入れをしていた馬の毛並を優しく撫でる。

「はい、私で良ければ」

口元を綻ばせながら、グレアムは了承してくれた。

歳をとるごとに顔に皺が少しずつ刻まれていくグレアム。しかしそれは老人というよりも「おじいちゃん」というような優しさを強調している。

「あのさ、グレアムって結婚してるよね？」

カーティスの突然の質問に、グレアムは一瞬きょとんとしたが、「はい。妻も子供もおります」

と、また元の微笑む表情に戻った。

グレアムの両親はもう他界しているが、どちらも使用人だった。

その子供であるグレアムもとある名貴族の家に仕えていた。

その家にはグレアムと同世代の令嬢がいた。流れるようなブロンドに、愛らしいくりつとしたエメラルドグリーンの瞳。

グレアムはその令嬢を一目見たとき、心臓を射抜かれたような感覚を覚えた（らしい）。

有り体に言えば、一目惚れだ。

仕えていた間の関係は、貴族令嬢と使用人なので滅多に口をきく機会はなかった。しかし令嬢は、御者としてせつせと忙しく尽くすグレアムに好意を持ったらしい。接近する機会があれば積極的に話しかけてくれた。

彼女の天使の笑みは、見るたびグレアムに独占欲を強めさせた。嗚呼、この人の傍にいたい。と感じるようになったのは出逢ってから五年ほどたってから。グレアム・令嬢ともに十八歳前後のことだ。

唇を重ね合う仲まで発展していたが、彼女の父親に見つかってしまった。当然の如く彼女には婚約者もいたため、父親は天と地がひっくりかえるほどの勢いで激怒した。その晩、追放命令を下された（要するにクビ）グレアムは泣き崩れている彼女にそっとう持ちかけたらしい。

「駆け落ちしよう」と。

彼女は突然のことに瞠目したが、すぐグレアムの堅い手を握り返した。

そしてそのまま二人の姿は何処かに消えたという。

というのがグレアムの逸話である。実は彼の夫人は有名貴族の令嬢なのだ。

そこいらの下手な恋愛小説より甘々でロマンチックな恋を見事愛に変えたグレアム。何故カーティスが「馬の手入れ命」のグレアムに相談をしようとしているのかというと、男女の色事について師事してもらいたかったからである。

「グレアム。グレアムは奥さんのこと、好き？」

自分では気づいていなかったが、顔が林檎になったカーティスを見て、全てを悟ったグレアムは目を細めながら微笑んだ。

「はい。それはとても」即答してやると、目の前の恋愛経験ゼロの少年は何故か更に狼狽えた。

「じ、じゃあ、もし奥さんに『嫌いだ』って言われたら……？」

言葉に詰まりながら、自分の疑問、いや気持ちを伝えようとする少年がとてもいじらしい。からかってやろうと思ったが、真面目に問いを重ねる思春期少年にいい加減なことは言えないと思い直し、素直に答える。

「抱きしめます」

想定外の答えだったのだろう。カーティスは絶句して沈黙してしまった。しかし顔は相変わらずものすごく林檎色だ。思い当たるこ

とでもあるのだろうか。

「抱きしめて、自分に非があつたか、それはどのようなことでどのように貴女を傷つけたのか、と優しく訊きます。そして非があれば素直に詫びて、もう一度私を『好き』になつてくれないか、と頼みます」

過去の楽しさや苦しさから導き出した経験を、ゆっくり想い出しながら紡いでいく。

「妻が『嫌い』でも私は『好き』です。生涯妻以外を愛しませんし、愛する気もありません」

そこで今まで下を見つめていたカーティスは、ぱつと顔を上げた。何か大事なものを得て、大切なことに気付かされた。青色の瞳は鏡のように澄み渡っていた。

「カーティスさま。逃げた魚というのは大変大きいものです。故に逃げられたときの喪失感は例えようがありません」

運命の女性も逃げてしまいますよ。

遠回しにそう告げたグラムは、くいつと顎を上げる。

「さあ、行きましょうカーティスさま！ 行先はいつもの森でよろしいですね！」

\*\*\*

自分以外に生物がいらないと思われるこの森は、静寂七割・雪三割で創られているのではないかと、この森唯一の生物、フェリシアは思う。

白銀で統一された森に、同じくほとんど白銀で統一されたフェリシア。吹雪が強くなくても、完全に同化してしまっている。よく目を凝らさないと彼女の姿を視界に捉えることは不可能だ。

絹よりももつともつと上質な白銀の髪が、彼女の華奢な身体を覆い尽くす。敏感な髪は、少しの風でも反応し舞い踊る。

氷の彫刻の如き完璧な美貌。

身にまとっているものは、薄く袖が無く、膝丈までしかないワンピース。露出した腕や脚や顔には色がないと思われるほど色素が薄い。形の良い小さな唇と、常に爛々と輝きを放っている濃蒼色の瞳が、彼女の唯一の『色』だ。

身体はどこに触れても、氷のように冷たい。凍ってしまわないのかと疑うくらいに。

そして彼女は独りだ。

かつてここにいた他の生物や仲間、もうとうの昔に姿を消してしまった。

孤独を融かすためにできることは何もなく、ただ時間だけが過ぎていく。

昨夜から続く吹雪のせいで、すっかり乾いてしまった唇を小さな舌でべろりと舐める。しかし冷気がそのかすかな潤いを奪っていつてしまう。

彼女は震えている。それは寒さのためではない。何故なら、彼女の種族の身体は寒さには頑丈に創られているからだ。

ではどうして震えているのか。

その理由は……。

馬の蹴りだす蹄の音が、沈黙していた空気を震わせフェリシアの耳朶まで届く。

気に留めるまでのことではない。馬車はよくこの森を通る。しかし、通り過ぎて行ってしまうのが常だ。

期待という単語は捨て、顔を自分の膝に埋めるという体勢に徹している、

フェリシア。



自分と呼ぶ声が聞こえた。でもいつもの幻想が作り出した幻聴ではないのか。

自分の耳を疑いながら、顔を上げ、耳を澄ますと、ザクザクと雪を踏みつける足音が聞こえてくる。

フェリシア。

どこか懐かしい声。

これは一体。

幻聴か。

『本物』か

……？

## 2 - 3 (後書き)

うぶ？なカーティスが書いて楽しかったです。

グレアムが理解ある人で良かったね、カーティス。

勉強のあいまあいまに執筆するので、なかなか更新という形にならず非常に残念です……。

風が北から強く吹きつけてくる。風は吹雪と一緒になり強度を増す。

白い肌に突風は針となって突き刺さり、痛みを感じさせる。金髪は今にも雪に純白に染め変えられてしまいそうだ。

ただでさえ視界が悪いのに、濃霧が更に見通しを効かなくさせる。小さな小さな水の粒が、空気中を浮遊している、楽しそうに。

冷気がまたやってきた。それは体温を奪い、辺りの温度をぐっと下げる。吐く息は白く、凍るようだ。息を吐きだし、吸い込む瞬間に水の粒が喉から入り込む。すると喉からすうつと冷えていき、身体全体に行き渡ってしまう。それは避けたいが、まさか呼吸しないわけにはいかない。凍死する前に窒息死してしまう。

必死に水の粒や冷気と格闘しながら前進する。分厚い靴で足を包んでいるのだが、雪はそんなものお構いなし。熊の歯のように簡単に通り返けてしまう。

そこまでつらい目にあうのに、なぜ彼は森を歩き進んでいるのか。答えは単純。

逢いたいから、だ。

誰に？

この森の主ともいえる、不思議な少女に。

人間とは実に面白い生き物だ。だって「逢いたい」という理由だけで極寒の森に出向いてくるのだから。

「逢いたい」から、寒いという当たり前の感覚を鈍らせながらひたすら前へ。そしてあてもなく少女の名前を呼ぶ。

フェリシア。

と。

返事は聞こえない。だが彼は簡単に引くつもりはない。

彼は少女の返事が聞こえるまで、この森を彷徨つても帰らないと決めていた。

是が非でも、少女・フェリシアの声が聴きたかった。

\*\*\*

ひゅー、ひゅるり。

冬の冷たさ満載の北風は、今日はいつてもより比較的穏やかだった。木々と雪以外何もなく、殺風景なこの森で生活している少女は優れた五感でそう感じ取った。風が落ち着く日は普段からたびたびあるのだが、少女は今日は何かが違う、何かが起きる、とも五感が感じた。

そのとき雪を踏みしめ歩く音と、小さな声が少女の耳に届いた。

フェリシア。

幻聴だと思った。

今まで孤独だったのが、そう簡単に解放されるはずはないと。

フェリシア。

懐かしい声。

なぜだ。なぜこんなにも、心が揺れる？

なぜこんなにも、この声に逢いたかったと思うのだろうか。  
私はこの声の主に、

逢いたかった。

意識した途端、無意識に涙が溢れ零れる。

ぬくもりに飢え手探りで探していた少女の涙は、止まらない。嗚咽を押し殺すため懸命に堪えていたが、やがて堰はもたなくなつて崩壊した。

足音はだんだんこちらへ近づいてくる。その証拠に音が大きくなつていく。

嗚呼、なんと自分は間が悪いのだろう。足音が大きくなつてくるのに、嗚咽が大きくなつていくなんて。

手で目元を覆うが、小さな手だけでは拭いきれない。細く白い指の隙間から、透明な雫が流れ落ちる。透明な雫が指を、手首を伝い、自分の髪色と同じ白銀の雪の地に着地する。

2、3滴のごく僅かな涙。しかしそれはどんな凶器よりも恐ろしい。何故ならこれは、一瞬で全てのものを巻き込んで凍らせてしまうのだから。

ピシッ、ピシッ。雪が氷に変化する音。

只でさえ冷たく、普通の者なら縮み上がる雪の上。彼女の涙は雪を個体にさせ、更に冷たく堅くさせる。己の姿が映っているこの地面は、鏡のよう。白銀の髪は確認しづらいが、肉食獣の瞳 不気味なほど怪しく妖艶に輝く、濃蒼色 はしっかりと映りこんでいる。

これが、私か。

自分の姿なのに、愛しいようなめちゃくちやに壊したいような。何ともいえない複雑な感情が湧き上がってきた。少女は涙で氷にな

った森の地を、優しくゆつくり触れる。そのまま細い指を滑らせていく。すると少し凹凸ができた所に指の爪がくいつと引っかかった刹那。

シュウウ……、と氷が白い冷気を出して溶けた。辺りは白銀の雪が降り積もった森に戻る。凍りつくのもまばたきを一回もできないという速さだったが、溶けるのもそうであつた。

「……儚い命だな。……私たちはそうでは、ないのだが……」  
そう、我らに命の箱は存在しない。即ち、寿命という概念がないのだ。

微かな時間に、微かな想い出に浸っていると、

「……フェリ、シア。よかつた、ここに、いたんだね……」

座り込んだ少女の頭上から、やけに疲労で上手く呂律がまわりきっていない男の声がした。

\*\*\*

長く住み慣れた森を離れて、人間が住む村に足を歩ませていったのは、どのくらい昔のことであつただろうか。

記憶はおぼろげだが人間を敵認定してから、それほどたつてなかったように思う。我が種族は寿命がない。だから歳月という感覚が大変鈍く、それがどれほど前のことだったのか脳がいちいち把握しきれないのだ。

その日のその村は、何やら騒がしかった。人間たちの思考は理解できないが、何かを讃え祀るために「祭り」というものを催してい

たらしい。昼はどんちゃん騒ぎで、五月蠅く迷惑なことこの上なかつたが、夜は対照的に静寂が染み渡っていた。

疲れるのだったら、昼間も大人しくしていれば良いものを。

心の底から、人間の言動に首を傾げる。何故、人間たちは意味もなく、ただ疲労するだけの「祭り」などを行うのだろう。

まあ、それはどうでもいい。人間を理解しようとは思わない。思えないからな。

冷たい漆黒の闇を足早に駆け抜ける。何故、敵である人間の居宅に訪れたのか。それについては特に意味はない。我らは人間のように意味や利害を考えて行動することはない。ああ、でも「祭り」については別だが。

……話が脱線してしまった。意味はないが、敢えて言うなら好奇心。もしあいつにばれたら口汚く罵られるだろうが。

片割れの顔を思い出しながら苦笑する。

足を進めながら、ふとあるものに目が止まった。

人間が住む家の窓から漏れている光だ。よく見ればあちらにもこちらにも。

何だ？ あいつらは日が沈めば就寝するのではないのか？ あの光を昼の明るさの代わりにしているのか？

人間に対して奇怪な印象を強めながら、更に足を前へ進めた。が、その足をすぐ止める。

どこの住居からか、美しい旋律が聴こえてきたからだ。滑らかで心洗われるような、澄み渡る旋律が。それは夜の静寂を裂くようなことはなく、むしろ逆に乗って、よく響いてきた。

しばらく耳を傾けていた。生まれて初めてだった。「旋律」というものに触れたのは。

旋律に満足して、四本足の獣は駆け足で跳ねるように、闇より深い漆黒の森へ姿を紛れ込ませていった。

\*\*\*

月よ、星よ、歩んできた道を照らして。  
輪郭や色がはつきりと浮かび上がるように。  
私のもとへ、愛しいあの人を導いて。

雪よ、花よ、美しい色は何ですか。

純白でも真紅でも濃蒼でもない。

私を、美しいあの人の色に染めかえて。

純潔よ、愛よ、優しく包み込んで下さい。

光を全て吸い込まれてしまってもいい。

私は、私の全てを貴方に捧げましょう。

印象強く頭に残った旋律を思い出しながら喉と唇を動かす。

初めてこの旋律を聴いたとき　なぜだがとても心が和み、落ち着いた。あのときはこれを奏でているのは楽器か何かだろうと思っ  
た。しかし後で知った衝撃の事実。

この旋律を奏でているのは楽器などではなく、まさかの人間その  
ものだったということだ。その衝撃に恐ろしいほどの勢いで驚愕し  
たが、人間にもあのような温かい声が出せるのかと、『敵』だと決  
めつけていた人間を少し修正した。

なんのためにこれを奏でるのかはいまいち分からない。しかし分  
からないながらもフェリシアはある一人の人物のために奏でていた。  
フェリシアの細い膝に頭を乗せて、眼を閉じている金髪の少年。

無愛想で皮肉なフェリシアを敬遠することがない、……カーテ  
イスという名の少年だ。

衣服ごしでも伝わってくる体温の低さの原因は、恐らくこの森を



彷徨っていたのであろう。フェリシアを見つけるために。

フェリシア、よかった。ここにいたんだね。

そう言った瞬間、彼の身体は崩れ落ちた。どうやら低体温のため意識を保てなくなったようであった。

人間とはなんと脆いものなのだ。

眼を閉じた、青白い顔の肌を指で優しくなぞる。久しく触れた、自分ではない肌の感触はすべすべして気持ちよかった。

嗚呼、こいつが人間ではなかったら。

それだけが悔やまれる。同種族であれば、障壁などないのに。

もしこいつが人間ではなかったら、どうしていたのだろうか。

立てても仕方がない前提で考えていると、自然に喉と唇が動いていた。

神よ。教えてくれ。

私はこの者といつまで、どこまで結ばれてもいいのだろうか、と。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8224y/>

---

白銀月夜の狼

2011年12月17日21時46分発行